

地域交流イベントを通じた美術・デザインの教育実践

六村 眞規子

ROKUMURA Makiko

本稿は、西宮市の野外文化事業である「野外アートフェスティバル in にしのみや」への参加を通じた美術・デザイン学科および専攻科（美術・デザイン専攻）の教育実践の紹介と、その考察を行うものである。美術・デザイン学科では地域社会との関わりにおける学びを、カリキュラムを構成する上での重要な特徴の1つと位置づけている。したがってここに紹介する実践も1つの授業単独のものではなく、授業の連携において実施されており、それは短期大学1回生・2回生、専攻科1回生・2回生の授業におよんでいる。本稿ではこのイベントで六村が担当したメインワークショップ「つくろう・あそぼうフェルト工房」での授業の取り組みを中心に報告する。地域交流イベントで、学生が美術・デザインという専門を媒体として他者と接触し、社会参加することで得る実感は大きい。学生の振り返りの感想を紹介しそれを考察する。

キーワード：イベント、ワークショップ、専門、双方向、内なる力

1. はじめに

<野外アートフェスティバル in にしのみや>

西宮市野外文化事業として毎年10月上旬の3日間開催されるアートイベントである。西宮芸術文化協会、西宮市、(財)西宮市文化振興財団が主催し、本学は共催として参画している。市役所前の公園を会場に、野外作品の展示や、西宮芸術文化協会のアーティストによる小学生から募集した詩を主題とする作品の現地制作、もの作りワークショップやアートフリーマーケットなどを実施して市民の交流の場をつくり出している。

本学美術・デザイン学科と専攻科の関わり方はここ数年変化を重ねており、学生の学習成果である作品の展示はもちろんのこと、会場中央に設置するメインモニュメントの制作や、市民に作品づくりの機会を提供するワークショップの開催などにも発展している。

今年度は、専攻科1回生が各自の作品を展示し、メインモニュメントの制作に関しては学内での準備を本科1回生、現地での組上げ作業を専攻科2回生が行った。イベントのメインワークショップであるフェルト

作りのワークショップ「つくろう・あそぼうフェルト工房」は、本科1回生・2回生、専攻科1回生が行った。また本科1回生が会場を彩るバナー（装飾旗）を染色して制作し、テープモニュメントも企画して野外環境の演出を行うなど、多方面から参加した。

<メインワークショップ「つくろう・あそぼうフェルト工房」開催の経緯>

学生の野外展示には、例年必ず羊毛を縮絨させて作ったフェルトの作品が登場する。柔らかく触れても安全な素材で、作品と触れ合うたくさんのこどもの姿が見られる。毎年好評を得て、昨年イベントでは、主催者からフェルト作りのワークショップを実施したいとの要請があった。試行錯誤であったが授業として取り組んだ結果、参加者の反応は大変良く、学生と共に大成功を喜ぶことができた。その経緯から今年度はイベントのメインワークショップとして開催することとなった。

「地域交流イベントを通しての美術・デザインの教育実践」としてこのワークショップの取り組みを具体的に報告する。

＜学生の地域交流イベントに対する意識＞

美術・デザイン学科では地域社会との関わりにおける学びを、カリキュラムを構成する上での重要な特徴の1つと位置づけ、2年前からは大学案内にも表現し、多くの学生は入学前からその説明を受けている。また、入学後すぐのオリエンテーションでは前年度の参加の様子や、作品を画像で目にしてしている。このような事前の案内が学生の地域交流イベントを通して学ぶことへの意識を高めている。

2. 方法

実施期間：平成21年10月10日～12日

調査対象：短期大学 美術・デザイン学科

1回生「染織」受講者 22名

1回生「アート&デザインプロジェクト」受講者 11名

※

2回生「専門実習ⅢB」受講者 6名

2回生「専門実習ⅢC」受講者 12名 ※

専攻科（美術・デザイン専攻）1回生「専攻実習Ⅱ」受講者 6名

※の科目の授業担当者は北野正治

手続き：ワークショップ中の学生の行動や、学生の振り返りの感想から考察する

3. 授業の展開と考察

＜メインワークショップ「つくろう・あそぼうフェルト工房」の内容と目的＞

今年度の「野外アートフェスティバル in にしのみや」では、割った竹の棒をつないで会場中央に組み上げた直径10mのドーナツ型メインモニュメントに、訪れた市民がフェルト玉を作ってそれを吊り下げ、メインモニュメントを完成させるプロジェクトを実施した。もの作りのワークショップとメインモニュメントが連動するこのプロジェクトの一端を担うのがメインワークショップ「つくろう・あそぼうフェルト工房」である。

フェルトとは羊毛の繊維が高密度に絡まりあっている状態のものである。空気を隙間に多く含んで柔らかい羊毛の繊維も、水分・熱・手による摩擦（振動）・弱アルカリといった諸条件が加わると、繊維の絡まりが促

進されて、固く引き締まったフェルトに変化する。

ここでのフェルト玉の制作行程は、羊毛を色とりどりに染色し、その繊維を短く切ってほぐしたものを用意する。参加者はその中から自由に色を選んで混ぜ合わせ、スポンジの芯をこの繊維で覆い、ネットに入れて湯に浸し、手の中で揉んだり転がしたりすることで繊維を絡ませ、直径6～7cm程度のフェルト玉を作る。フェルト玉には吊るすための紐と名前を書いたリボンを縫い付ける。学生は制作環境を整え、この一連の作業の手助けを行う。

このワークショップは、市民にももの作り体験を通じてその楽しさと喜びを伝えるものである。また学生は、この体験を参加者に提供することで社会参加し、自分の専門の美術・デザインが人々に働きかけ、その反応を直接受け取り、創造の原動力である伝わる喜びを得ることになる。これが学年や科目を超えたこのワークショップにおける授業の目的でもある。

『なぜ“ワークショップ”だったのか』（前田ちま子著）の中で前田は「“ワークショップ”は、ある体験をするものと体験を設定する者との関係が生じるが、それは「教える」「教えられる」という固定した関係ではなく、「体験する」と「体験させることを体験する」という生きた関係である。活動のために環境を設定した者も、設定された者も、活動環境の中でお互いに影響し合いながら、相互を高めあう。そこに“ワークショップ”の意味がある。」と述べている。ここではフェルト玉作りをする参加者が「体験する」で、学生は「体験させることを体験する」であり、授業担当者の私自身もまた「体験者」である。共に体験する有機的な生きた関係の中で学びが展開する。

＜授業の展開＞

ワークショップの事前授業

当日を迎える前に、各授業において前年度のワークショップの模様を紹介し、フェルト玉の制作行程の説明の後、各自がフェルト玉を制作した。制作に関しては、次の2点を強調した。

1. 繊維の色合わせを楽しむ
2. 手の中での触感の変化を楽しむ

さらに今回のワークショップでは、メインモニュメントとの連携を考慮し、短時間（実際には個人差があるが10～20分）でできる作業であることと、誰でも作れることを重視した。昨年こどもが主たる参加者であ

ったことに加え、高齢者や身体障害者、知的障害者など、多様な参加者が素材の触感を楽しんだことから、ワークショップの素材としての羊毛の繊維・フェルトの可能性と、触覚体験の重要性を再認識した上での内容設定である。また、今回はメインメニューに展示することで参加者の達成感を増し、遊びへの展開を期待した。

下記 a, b, c は昨年の経験から生まれたフェルト技法上の工夫である。d はこの授業中に学生から出た提案である。どれも作業をシンプルにして、短時間で誰もが取り組めるものへと近づけた。

- a. 日頃のフェルト制作では弱アルカリの石けんを湯に溶いて用いたが、今回は石けん無しで湯を用い、手やフェルト玉の濯ぎ行程を省いて簡略化させる。
- b. 繊維を4~5cmに切っておくことで、絡みやすくなりフェルト化が進む。
- c. ネットを使うことで繊維がスポンジ芯から分離することなく作業を進めることができ、こどもの小さい手でも作業がしやすくなる。
- d. 小さな器に選んだ繊維をほぐしながら入れることでほぼ適量を意識できるようになり、繊維の量が足りず芯のスポンジが出てきたり、多すぎて手の中で扱いくくならない。

学生は色とりどりのフェルト玉を作り、この時点でのワークショップに対する不安の声は聞かれなかった。

ワークショップを通して

今年度のイベントは台風が去った後の快晴の3日間の開催となった。休日のため各授業日を振替え、学生には平常の1日の授業と同じ3時間程度を割当てて、ワークショップでの授業を実施した。

天候や不特定な参加者など流動的要素の多いイベントにおいて、実施場所の環境づくりは成功への大切な要素である。この授業のように、学生のワークショップの技術的到達が第一の目的でない場合は、参加者と学生双方に内容のシンプルさが必要であるが、特に前述の技法上の工夫や環境づくりが重要となる。

開催場所のテント前には、主催者が用意した「つくろう・あそぼうフェルト工房」の大きな文字の他に、学生が制作した羊のイラストりの看板パネルを設置し、テント内部には、学生が事前の授業で制作した色とりどりのフェルト玉を天井から吊り下げ、楽しさを演出すると共に、目的を視覚的に示すことで参加者の制作

の導入を容易にした。テント内は作業手順に沿ってコーナー分けし、まず3つの長机にはカラフルな羊毛の繊維を大きな器に山盛り入れて置き、人を呼ぶディスプレイとしての役割を持たせて、参加者が色を楽しんで制作できるコーナーとした。次の湯に浸すコーナーでは衛生面を配慮して、参加者ではなくビニール手袋をはめた学生が作業を行い、最後の紐と名前のリボン付けのコーナーでは、学生が縫い付けをして、ここでメインメニューへの展示と作品の返却について説明をすることとした。

各コーナーでの作業を実際にやって見せた後、学生は学生がデザインしたスタッフバッジをつけ、各自自由にコーナーの担当につく。担当者の少ない所はこちらから指示を入れ移動を求めたが、無理強いはいしない。開始直後から参加者に上手に言葉掛けをしながら対応する学生もいる一方、無口な学生もいたが特に支障はなかった。参加者は予想通りこどもが多く、家族での参加も多数あった。予想できなかったのはその人数で、3日間で延べ800人におよんだ。展示せず直ぐに持ち帰りたいたいという参加者には、2個目を制作してもらったので、800個がそのまま実質人数ではないが、予想数を遥かに超え、羊毛の繊維のカットやスポンジ芯作りなどの準備にも追われることになったが、次々訪れる参加者に学生は躊躇する暇なく対応していた。その結果、担当の仕事の理解と上達が急速に進んだだけでなく、状況を判断し自主的に行動する姿勢が生まれている。

また、参加したこどもたちにとって羊毛の繊維・フェルトはめずらしいもので、手の中での変化は不思議で驚きがあったようだ。それがこどもたちの率直な発言や反応に現れ、呼応して自然と学生から言葉が引き出され、双方向の言葉のやり取りが随所に生まれており、もの作りを通した楽しい活発な交流の場ができたことは特筆に値するであろう。

学生の感想と考察

専攻科1回生の「野外アートフェスティバルinにのみや」を振り返っての感想の一部を紹介する。

「現地に着いた時、真っ先にワークショップの大きい看板が目に入って、人がたくさんいたことが嬉しかったです。スタッフのカードに私の羊が使われて良かったです。ワークショップでは、ずっと黄色いスポンジを切っていました。それを見たこどもが、「リング切ってるみたい!」と言ったことにビックリしました。こどもたちの笑顔がたくさん見れて、作品と笑顔はむ

すびついているのだと実感することができました。」

「今回のアートフェスティバルでは人と関わって作品を作り上げるなど、美術を通して地域の人たちと仲良くなったことは、とても良い経験ができたと思います。フェルトの工房では、小さい子どもたちの名前を聞いて、フェルトに布を縫い付ける作業をしていて、子どもたちに「作品作りは楽しい？」と聞くと、ほとんどの子たちが「たのしい！」と答えてくれて、その笑顔に癒されました。作品と人が触れ合う瞬間を見て、とても嬉しかったです。」

「野外アートフェスティバルは、去年フェルトの鳥を作って、みんなでぶら下げて、とても楽しかった思い出があります。今年もフェルト玉を作って、昨年より大きな竹で作ったアーチにぶら下げて、年々大きくなっていくのにも感動しました。子どもがたくさん来るので、竹のアーチを作る時も、子どもの目線なども考えて、少しでも安全になるように考えていって、設置したのも勉強になりました。」

これらの感想からは、子どもたちの表情や様子、言葉に注意を傾け、肯定的に捉えようとしている学生の姿が読み取れる。自分の専門である美術・デザインやその作品が、人々に受け入れられて展開していることを実感として受け取っていると判断できる。そしてこの経験は、学生の専門を学ぶ意欲へとつながるものと考えられる。また、前述のワークショップにおける学生の様子からは、人との交流を通して自然と学生の内なる力が引き出されると言えるであろう。

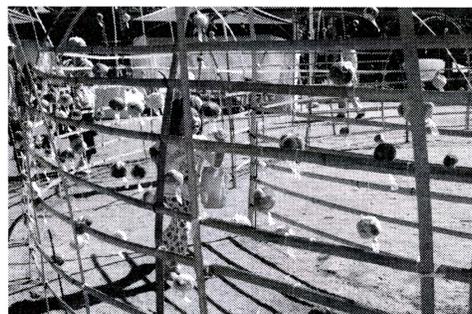
なお今後は学習効果のデータの集積を提示し、考察できるようにしたい。

4. おわりに

竹で組んだメインモニュメントは「つくろう・あそぼうフェルト工房」で作ったカラフルなフェルト玉で飾られ、その中を駆け回って遊ぶ子どもたちでにぎわった。西宮市は少子化が叫ばれている今日、子どもが増加している希少な地域であり、この特色は地域交流イベントにも反映されている。美術・デザイン学科では地域交流を通じて、積極的に地域と学生の双方向の学びを実践し積み重ねている。この「アートフェスティバル in にしのみや」での教育実践も学科の教職員の理解と協力で実施され、北野正治教授が何度も主催者との協議会に足を運び実現していることを付け加える。

5. 引用文献・参考文献

前田ちま子(2002)「なぜ“ワークショップ”だったのか」高橋陽一監修 杉山貴洋編集 『ワークショップ実践研究』 武蔵野美術大学出版局 pp50-65



<ピアスーパーバイザーからのコメント>

近年、無目的で入学する学生が増加傾向にあると報告されており、その多くは意欲もなく無気力であると言われている。

この研究では学生たちが専門性を生かし、地域交流イベントのワークショップに取り組んだ経過が詳細に報告されている。児童から高齢者、障害者など多様な参加者とのかかわりを通して、その作品が人に喜びを与え社会に受け入れられたと実感したことで、更に専門を学ぶ意欲へと発展したということである。この報告は他の分野の実践においても注目すべきことであると考ええる。

(担当：児童教育学科 倉掛妙子)